

教務だより

2010年8月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

中国での工場体験

茗溪塾塾長 宇野雅春

大学のゼミの学生たちが、中国の工場に「体験」をしに行くTV番組を見たのは、今から2年くらいも前のことです。言葉も通じないまま、寮の様などで中国の工場労働者と共同生活をしながら、仕事をするのですが、仕事にも生活にも慣れないまま悶々とする日本の学生の姿がそこにはありました。単純な長時間の労働にも当然のようになじめないでいます。ゼミのメンバーで話し合っているうちに、これではだめだと気付き、行動を起こします。言葉は通じないまでも、身振り手振りで会話をつなげようとします。そのかいあってか言葉を中国人が教えてくれるようになります。きっかけはいろいろです。洗濯の仕方を教えてもらったり、たまたま中国語の話せる日本人が参加したり…などというようなこと。また自分たちも中国語に積極的に取り組み始めます。コミュニケーションができると、途端に周りが生き生きしてきます。職場も明るくなります。

ゼミのリーダー格の女子学生のこの体験に参加した理由が、就職を前にして「どうして人は働くのか？働くとは何か？自分にとっての仕事の意味を見つけないか」というものです。中国人労働者たちとの交流が深まる中で、ゼミのメンバーたちは「アンケートの実施」を思いつきます。アンケートにはいくつかの項目があったと思いますが、その中に「あなたにとって働くとはどんなことですか？」という項目や「あなたの夢は何ですか？」という内容が含まれていました。アンケートには皆、快く答えてくれますが、どの中国人も「あなたにとって働くとはどんなことですか？」という質問には戸惑いを見せます。意味がわからないという事なのです。学生たちは毎日早朝から仕事を求めて工場の門の前に並ぶたくさんの若い中国人の事に気が付いていきます。遠い農村地帯から出てきた、まだ20歳前の少女たちもたくさんいます。ただし大半は仕事をもらえない状態です。そこには中国の「働く必要」を切実に求めた人たちの群れがあります。働くという事が、選択の1つにすぎない日本の学生達が、その「意味」を求めてさまよっているのとは大きく異なる現実です。日本の学生の「あり様」が見えてきます。食べるために働くという当たり前のことが当たり前でなくなっているということ。そして学生たちはアンケートの中の「あなたの夢は何ですか？」という質問には生き生きとはっきり答える中国人労働者たちにびっくりします。みんな将来に夢を持ち、それに向けて辛い労働にも耐えて頑張っているようにみえます。この工場体験は、某大学のゼミが中心で行っているものですが、多くの内容を示唆してくれていると思いました。就職試験を渡り歩きながら、実は何をやりたいのかと悩む学生たちの姿に、多分一番戸惑っているのは、「親たち」ではないかと思えます。子供たちの中にすっぱりと「生活」が抜けているのです。親は相変わらず生きるための仕事を強要されています。子供への責任で頑張るしかない状況です。でも、子供たちの中にその現実感が薄いのです。恵まれすぎている子供ほど頑張る必要を感じないのは仕方のないことかもしれません。当然家庭を持つとか子供を育てるとかは意識の中にはない気もします。自分達はいつまでも「子供」のつもり？かもしれません。そんな子供たちにとって「受験」は将来や生活を考えるチャンスと言えないだろうか？とふと考えます。

国が発展しているときには、夢は見つけやすいものです。国が成熟してきたとき、何かになるという夢よりも「どう生きるか？」の方が多分大きく立ち上がるのだと思います。

夏期講習の授業内容は一通り終わりました。ここから短期集中特訓・夏期合宿・やり直しタームと続きます。子供たちの一年一年が、それぞれの未来に繋がっていくことを願わずにはられません。今必要なことは、一人ひとりの子供たちの中に、生活も含めた未来設計をどう定着させるかという事だと思います。「生活習慣」の獲得はその中で重要なことだと思います。直面する問題は時代とともに変わるのには致し方ないとしても、前に進んでいることを信じて更によりよい実現に向けて努力を積む必要を感じています。